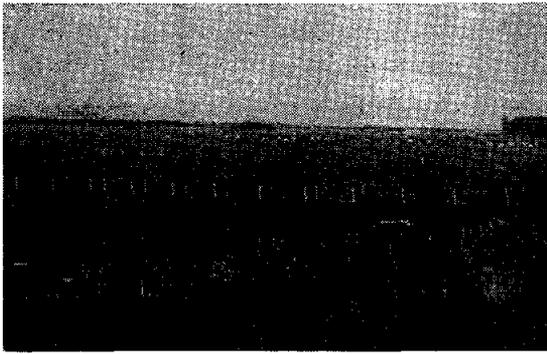


標津俵橋泥炭地

桜 田 純 司

俵橋泥炭地は、標津川および標津川の支流・武佐川の周辺一帯の泥炭地をいい、地形的にみてだいたい三つのブロックに分か

れる。すなわち標津川の南側、北側および標津川と武佐川にはさまれた地区である。この地区は標津川河口に近いところの泥



標津俵橋地区草地 (A団地)

炭地を除いて、標高五メートル以上であり泥炭地として一九メートルまで分布している。背後丘陵地から河川までの泥炭地はくぼ地もあるが、勾配でほぼ〇・〇二〜〇・〇三、だいたい平坦といえる。

泥炭の堆積状態は地表下30センチメートル内外はピロウドスゲ、ワタスゲ、ヌマガヤなどが主材となり、中間に火山灰を含んでいる。最下層はヨシ、ハンノキを主材とする低位泥炭となっている。そしてこの中

表一 泥炭の物理性

昭和48年8月試料採取

地点	深さ	比重	単位体積重	間ゲキ率	強熱減量	分解度
	(cm)		(g/ml)	(%)	(%)	(%)
未造成地 (標津川の近く)	5~10	1.33	0.17	86.6	60.9	75.4
	15~20	1.47	0.18	87.2	87.1	85.5
	25~30	1.30	0.11	90.7	99.1	71.2
	35~40	1.23	0.09	92.0	96.1	56.9
昭和45年 木場排水 キヨ施工 区地点	5~10	1.65	0.19	88.3	81.2	76.6
	15~20	1.76	0.22	86.0	51.6	80.4
	25~30	1.49	0.12	91.4	93.6	75.8
	35~40	1.41	0.14	89.9	86.9	86.4

間泥炭地の内外に、かなりの面積にわたって高位泥炭地、低位泥炭地が存在している。高位泥炭地の堆積状態は地表下五〇センチメートルほどがミズゴケを主としている。これら泥炭地は泥炭の堆積深さが三〜五メートル程度であるが、場所によっては一メートル前後の浅いところに緊密な火山灰があつて、支線排水路の底部にそれが露

出し、泥炭層との界でくずれなどが起きているのがみられる。

俵橋地区泥炭地は昭和二十八年に一二三戸入植の開拓計画がなされたが、計画だけに終り、また泥炭の工業利用を目的とする調査も行われたこともある。この頃に後背地の農業開発のため、標津川・武佐川の河川改修工事がはじめられている。その後、昭和三十八年に俵橋泥炭地を乳牛育成基地にしようとして大規模草地改良事業の調査計画がはじめられ、三つのブロック約九三〇ヘクタールの放牧地、採草地が昭和四十四年着工されて、現在約七一〇ヘクタールの草地造成が完了している。

草地造成以前の泥炭地は谷地坊主がよく発達していて地表一面に小さい凸凹がたたくさんみられ、排水が悪いなどは他の泥炭地と同じである。現在草地造成が行われたところをみると、泥炭地の草地化の技術の進歩により一般土壌の草地と大差ないものまでできるようになったが、まだ泥炭地特有の問題点が存在している。

この地区の泥炭地は深さ二〇センチメートル前後に火山灰層を含むためと、泥炭そのものが繊維質であるために、他の泥炭地

に比べて堅さが幾分ある。それで地表面から深さ四〇センチメートルまでの泥炭の物理性について、草地造成地点と未造成地点を比べると表のごとくである。これによる場所の違いもあるが、草地造成することにより火山灰が各層に入るため比重が大きくなり、また排水、放牧による圧密、圧縮、牧草の根による単重の増大がみられる。また、この泥炭で乾燥収縮実験を行ってみると、収縮量は小さく火山灰を含む場合は三〇パーセント、火山灰を含まない場合で四〇パーセントである。これは分解分の多いみそ泥炭などの場合の収縮量が六〇〜七〇パーセントに達するのに比べると、非常に小さい値である。また泥炭の水分保持試験においても幾分小さい値を示している。

これらのことにより、俵橋地区泥炭は泥炭の中でも前述のように繊維質で、構造的にかなり堅牢な部類にはいるものと考えられる。一般的にみて地形、標高、泥炭の物理性などからみて、標津俵橋地区は他の一部の泥炭地よりも、草地として利用されやすい状態にあつたとも考えられる。

(北大農学部農業土木教室)